

樋口一葉と伊勢屋質店① 年譜からみた伊勢屋質店との関係

樋口一葉は明治23年9月から26年7月までの3年間、本郷菊坂の借家に暮らしていました。その菊坂時代を語るのに欠かせないのが、伊勢屋質店です。父則義の死後、樋口家の戸主となった18歳の一葉は、作家として身を立てる決意をします。しかし、手探りでめざす職業作家への道は、険しく、母と妹も着物の仕立てや洗い張りで支えるものの、生活は苦しくなる一方でした。

こうした折り、駆け込んだのが近所にあった伊勢屋質店でした。「伊せ屋がもとははる」。一葉は何度も日記にこう記していて、当時の逼迫した様子が浮かび上がってきます。伊勢屋が一葉一家の窮乏生活を辛うじて救っていたと言ってもいいでしょう。一葉と伊勢屋の縁は、菊坂の地を離れた後も、亡くなるまで切れることはありませんでした。
(文学部教授 小仲信孝)

樋口一葉略年譜

| 年 | 年齢 | 事項 | 伊勢屋質店へ通った時期 |
|-------------|-----|---|---|
| 明治5(1872)年 | 0歳 | 旧暦3月25日(新暦5月2日)、樋口則義・滝子の次女として生まれる。戸籍名は奈津。父・則義は甲斐国山梨郡中萩原村の農民であったが、江戸に出て蕃書調所の小使を振り出しに、八丁堀同心の株を買って直参となった。維新後は、東京府庁に勤務。一葉の上には長女ふじ、長兄泉太郎、次兄虎之助がおり、明治7年には妹邦子が誕生した。 | |
| 明治6(1873)年 | 1歳 | 11月父・則義、東京府少属を拝命。 | |
| 明治7(1874)年 | 2歳 | 6月妹・くに誕生。12月父・則義、教部省権大講義を兼務(～明治8年9月)。 | |
| 明治8(1875)年 | 3歳 | | |
| 明治9(1876)年 | 4歳 | 9月父・則義、東京府中属を退官。 | |
| 明治10(1877)年 | 5歳 | 3月一葉4歳で公立本郷学校に入学するが、幼少を理由に退学。秋、私立吉川学校下等小学第八級に入学。10月父・則義、警視局雇となる。 | |
| 明治11(1878)年 | 6歳 | 6月吉川学校下等小学第八級を卒業、七級に進み、この年のうちに退学。 | |
| 明治12(1879)年 | 7歳 | | |
| 明治13(1880)年 | 8歳 | | |
| 明治14(1881)年 | 9歳 | 3月父・則義、警視庁警視属となる。11月一葉、私立青海学校に小学二級後期に編入学。 | |
| 明治15(1882)年 | 10歳 | | |
| 明治16(1883)年 | 11歳 | 12月一葉、青海学校小学高等科第四級を首席で卒業。父則義はさらに上級に進学させることを望んだが、母の強い意見で進級せず退学。泉太郎家督を相続。 | |
| 明治17(1884)年 | 12歳 | 一葉、1月から3月まで、和田重雄に通信教育で和歌の指導を受ける。神田区同朋町の松永政愛の妻のもとに通い、裁縫を習い始める。 | |
| 明治18(1885)年 | 13歳 | 松永政愛宅で渋谷三郎を紹介される。 | |
| 明治19(1886)年 | 14歳 | 8月20日より遠田澄庵の紹介で、小石川水道町14番地にあった中島歌子の歌塾・萩の舎に通い始める。塾は毎月9日が例会、毎週土曜日が稽古日であったが、一葉はほとんど休まずに出席した。 | |
| 明治20(1887)年 | 15歳 | 1月15日より日記『身のふる衣 まきのいち』をつけ始める。6月父・則義、警視庁を退職。長兄・泉太郎、大蔵省出納局雇となったが、12月27日肺結核で死去(享年23歳)。 | |
| 明治21(1888)年 | 16歳 | 2月22日父・則義を後見人として家督を相続、戸主となる。5月、黒門町の自宅を売却し、虎之助の借家同居する(これ以後一家は借家住まいとなる)。父・則義、東京荷車運輸請負業組合の設立に乗り出す。 | |
| 明治22(1889)年 | 17歳 | 3月12日父・則義の事業は失敗に終わり転居。一葉、この時期に田邊花圃の『藪の鶯』の影響を受けて小説を書き始める。7月12日父・則義、事業の失敗による心痛がもとで病状が進み死去。 | |
| 明治23(1890)年 | 18歳 | 5月から萩の舎の内弟子として中島家に住む(翌年3月まで)。この期間に女学校の教師に推薦する話があったが実現しなかった。9月、本郷菊坂町の借家に移る。一家は裁縫・選択等の内職で生計をまかした。 | |
| 明治24(1891)年 | 19歳 | 4月11日より日記『若葉かげ』を書き始め、これより本格的な日記が始まる。4月15日小説の指導を受けるため、半井桃水を訪問。10月、小説『かれ尾花一もと』を執筆。 | |
| 明治25(1892)年 | 20歳 | 3月『闇桜』を発表。『別れ霜』を連載。4月『たま櫛』を発表。6月桃水との間柄を萩の舎で詰問され、桃水との師弟関係を解消。7月『五月雨』を発表。10月から『経つくえ』を連載。11月『うもれ木』を発表。 | |
| 明治26(1893)年 | 21歳 | 2月『暁月夜』を発表。3月『雪の日』を発表。7月下谷龍泉寺町に転居。8月6日荒物・駄菓子店を開く。12月『琴の音』を発表。 |  |
| 明治27(1894)年 | 22歳 | 2月『花ごもり』を発表。5月、本郷区丸山福山町に転居。月額二円で萩の舎の助教となる。7月『暗夜』を発表。12月『大つごもり』を発表。 |  |
| 明治28(1895)年 | 23歳 | 創作活動の頂点ともいえるべき年で、文名も著しく高まる。1月『たけくらべ』を発表。4月『軒もる月』を発表。5月『ゆく雲』を発表。8月『うつけみ』を連載。9月『にぎりえ』、『雨の夜』、『月の夜』を発表。10月『雁がね』、『虫の声』を発表。 |  |
| 明治29(1896)年 | 24歳 | 1月『この子』、『わかれ道』を発表。2月『裏紫』(上)を発表。3月、肺結核を発病。4月、森鷗外・幸田露伴に『たけくらべ』が絶賛される。5月『われから』を発表。『通俗書簡文』刊行。『あきあはせ』を掲載。7月『すゞること』を発表。8月駿河台の山龍堂病院で病状は絶望的と診断される。9月青山胤通の往診を受けるが、絶望と診断される。11月23日一葉死去。茶毘に付され、築地本願寺樋口家墓所に葬られた(現在は杉並区永福の西本願寺墓所)。法名は智相院釈妙葉信女。 |  |

樋口一葉と伊勢屋質店② 一葉の住まいと菊坂町

24年6ヶ月という短い生涯のなかで、一葉は文京区内をはじめ、千代田区、港区、台東区など16カ所に居住しました。このうち、文京区内の居住期間が最も長く、およそ11年に及びました。作家としての活動の中心となったのも文京区内でした。

樋口一葉の居住地と文京区・菊坂町

| 年 | 年齢 | 居住地 |
|-------------|-----|--|
| 明治5(1872)年 | 0歳 | 東京府第二大区一小区(現・千代田区)幸橋内東京府庁抱地内長屋で誕生 陰暦8月7日第五大区四小区(現・台東区)下谷練堀町43番地に転居 |
| 明治7(1874)年 | 2歳 | 2月21日第二大区六小区(現・港区)麻布三河台町5番屋敷に転居 |
| 明治9(1876)年 | 4歳 | 4月4日第四大区七小区(現・文京区)本郷6丁目5番屋敷に転居 |
| 明治14(1881)年 | 9歳 | 7月1日までに下谷区(現・台東区)御徒町1丁目14番地に転居 10月14日下谷区(現・台東区)御徒町3丁目33番地に転居 |
| 明治17(1884)年 | 12歳 | 10月1日下谷区上野西黒門町20番地に転居 |
| 明治21(1888)年 | 16歳 | 5月26日芝区(現・港区)高輪北町19番地常光寺門前の次兄・虎之助借宅に転居 9月9日神田区(現・千代田区)表神保町2番地に転居 |
| 明治22(1889)年 | 17歳 | 3月12日神田区(現・千代田区)神田淡路町2丁目4番地に転居 9月4日芝区(現・港区)西応寺裏の次兄・虎之助借宅に転居 |
| 明治23(1890)年 | 18歳 | 5月から萩の舎の内弟子として中島家に住む(翌年3月まで) 9月本郷区(現・文京区)本郷菊坂町70番地に借宅 母・多喜と妹・くにを住ませる |
| 明治25(1892)年 | 20歳 | 5月5日本郷区(現・文京区)本郷菊坂町69番地に転居 |
| 明治26(1893)年 | 21歳 | 7月20日下谷区(現・台東区)下谷龍泉寺町368番地に転居 |
| 明治27(1894)年 | 22歳 | 5月1日本郷区(現・文京区)丸山福山町4番地に転居 |

関礼子、1985、『略年譜』『新潮日本文学アルバム3 樋口一葉』新潮社 山梨県立文学館、2009、『樋口一葉と甲州』をもとに作成

樋口一葉ゆかりの地



江戸明治東京重ね地図明治40年復元地図をベースに、塩田良平ほか編、1978、『樋口一葉全集 第3巻 下』筑摩書房を参考に作成

樋口一葉と伊勢屋質店③ 日記に描かれた伊勢屋質店

父は官吏であり、一葉の幼いころの生活は、比較的豊かでした。しかし、明治20(1887)年12月に長兄・泉太郎が病没し、明治22(1889)年7月には父・則義が事業の失敗による心痛がもとで病死してしまいます。すると家計は急激に悪化していきました。一葉は父の事業の負債を返済し、かつ家長として、母・多喜と妹・邦子を支えていかなければなりませんでした。

質店へ行くことが現実的になり始めたのは、明治25(1892)年8月のことでした。8月28日、一葉と妹の邦子が、母・多喜に質入れを提案しています。けれども、母は質店に足を運ぶことに強く反対しています(8月30日)。

けれども、翌明治26(1893)年には、一家は伊勢屋質店に通うことになっていました。4月3日に「伊勢屋がもとに走る」^{*}との記述がみられ、これ以降、伊勢屋質店に関する記述が多く見られます。生活が困窮するなかで、多くの衣類を質に入れていました。そのため衣替えにあたって、伊勢屋の蔵に収められた衣類を思い出すにはいらませんでした。「時は今まさに初夏なり。衣替えもなきではかなわず。浴衣などおおかた伊勢屋が蔵にあり」^{*}(明治28(1895)年5月17日)。

※読みやすく表記を改めています

樋口一葉の日記 抜粋

明治25年8月28日

「我家貧困只せまりに迫りたる頃とて、母君いといたく嘆き給ふ、此月の卅日かぎり山崎君に金十円返却すへき筈なるを、我が著作(未だ)成らず一銭を得るの目あてあらず、人に信をかくこと口惜しとて也、種々談合、おのれ国子ある限りの衣類質入れして一時の急をまぬかれはやといふ、母君の愁傷これのみとわひし」

明治25年8月30日

「母君しきりに質入れのことを可ならずとして、安達^[安達盛貞]に一度金策たのまん^(赴き)と早朝趣き給ふ、我つとめて止めたれと甲斐なし、同家不承だくのよしにて午前に帰宅、思ひしこと也とて一同笑ふ」

明治26年4月3日

「空晴れに晴れていと心地よし、…この夜伊せ屋^(が)かもとにはしる」

明治26年5月2日

「此月も伊せ屋^(が)かもとにはしらねは事たらず、小袖四つ羽織二つ一風呂敷につゝミて、母君と我と持ゆかんとす、長持に春かくれ行ころもかへとかや誰やらか句を聞き事あり、其風流には似さるもをかし、蔵のうちにはるかかくれ行ころもかへ」

明治26年5月3日

「暁かたより大雨車軸をなかつか如し、…母君八例の血の道にて臥し給へり、…今日母君いせ屋^(が)かもとに又参り給ふ」

明治26年7月10日

「田部井より金子うけると、此夜さらに伊せ屋^(が)かもとにはしりて、あつけ置たるを出し、ふたゝひ売に出さんとするなといとあはたし」

明治26年8月6日

「夕刻より着類三つよつもちて本郷の伊せ屋^(が)かもとにゆく、四円五拾銭かり来る」

明治27年2月2日

「年始に出つ、きるべきもの、塵ほとも残らず、よその蔵にあつけたれは、仮そめに出んとするものもなし」

明治28年5月2日

「早朝書あり、安達^[安達盛貞]の妻よりかねてのかり金催促の趣き、五円斗なれどもいま八手もとに一銭もなし、難きを如何にせん、…此夜母君及び国子として伊せ屋^(が)かもとにはしり給ふ、金四円五拾銭かり来る、はやく臥たり」

明治28年5月8日

「此夜西村^[西村剣之助]君刀剣及び南洲^[西郷隆盛]の掛物持参、これを質入して金子五十金斗得たしといふ、母君同道、伊せや^(が)かもとへゆくに目利とぐかねばとてとゝのひ難し、すでに今宵八十時を過ぎぬ、明けぬればやがて入るべき追証扱の金也、いかにせんと当惑の額をあつむ、さらは致し方なし、衣類もて来給へ、明早朝伊せや^(が)を口説き三十四十八作るべしといふに、さらはとて西村君かへる」

明治28年5月9日

「早朝礼助衣類を持参六品あり、その外に銀時斗一箇合せて四十金と申せしに、伊せや^(が)中々事むづかしうひて僅かに二十二を用立てしのみ、さらは甲斐なし、これを一まづ西村に持せやりて此日くれまでに八、あらんほどの我等が衣類取まとめて、猶明日の追証扱を作らばや、そのほかに八又よそより金子のかり入れもつくへしなど語りあふほどに釧之助も参る」

明治28年5月17日

「かしらのわるくていと寐ふたきに終日床にあり、…星野君より文学界の寄稿かならずと申しこされしは十四日成りしか、いまたに筆取ることのものうくて、一回の原稿もしたゝめあへず、二十日ころまでと思ふによいよかしらいたし、時八今まさに初夏也、衣かへもなさて八かなはず、ゆかたなど大方いせや^(が)蔵にあり、…かしら痛き事さまざま多かれとこ八これ昨年の夏かこゝろ也、けふの一葉はもはや世上のくるしみをくるしみにとすへからず、…胸間さまざまのおもひをしはし筆にゆたねて、貧家のくるしみをわすれんとす」

明治28年5月22日

「釧之助来訪…これより直二例の伊せや^(が)かあづけを引出し給はれとて喜色まん面にあふれぬ、…家八貧たゝ迫りに迫れとこゝろ八春の海の如し」

明治28年6月16日

「家に一銭のたく八へなき上、差配^(が)かもとへおさむへき家ちんもあとの月より延し置たる、それこれ三円の金なくて八かなはず、伊せや^(が)へはしらんか、ひとのもとへかりに行かんかなといふ」

明治29年6月2日

「家は中々に貧迫り来てやる方のなければ、綿の入りたるもの裕なとはミなから伊せや^(が)かもとにやりて、からく一二枚の夏物したて出るほとなれとも、やかてのくるしみをうけまじとて、母も国子も心ひとつに過す、いとやるかたなし」

塩田良平ほか編、1976、『樋口一葉全集 第3巻 上』筑摩書房
塩田良平ほか編、1978、『樋口一葉全集 第3巻 下』筑摩書房
佐野和子、2018、『樋口一葉と伊勢屋質店』『旧伊勢屋質店調査報告書』文京区教育委員会
をもとに作成